1 た・づ・な

「世界を駆けるサラブレッド」

公益財団法人
軽種馬育成調教センター
理事長
伊藤　克己

毎年、世界で10万頭以上になるサラブレッドが生産されています。それらは、各国の血統書によって厳正に管理されています。サラブレッドはこの3世紀の間に全世界に広まり、各国での競馬の発展の基となってきました。

日本でのサラブレッドの歴史も100年を経て、当然その生産は欧米から繁殖用馬を輸入することが始まりでした。多くの先人たちが多大の投資と情熱をもって、海外に生産の基礎となる馬を求め努力されてきた所産であると思います。

翻って、「強い馬づくり」の議論のなかで、生産界に対する提言として、生産基盤の強化・繁殖用馬の改良・生産および育成技術の向上が言われました。この繁殖用馬の改良のため、海外から新しい血を導入することが当然考えられます。今回、この視点から海外からの輸入馬の状況を私なりに見てみました。

日本での生産の基盤となったのは、「サラブレッド血統書」第一巻と第三巻に記載された明治末から大正・昭和初期に輸入した種牡馬72頭と繁殖牝馬269頭でしょう。それらの生産馬が戦前の競馬を支え、さらには、戦後競馬が再開され海外からの輸入が昭和27年にできるようになるまで、およそ600頭の繁殖牝馬群を半世紀の間維持しました。

中央競馬と地方競馬の開催がされるようになり、減少した繁殖用馬数の回復のために昭和27年から45年までの19年間で、苦しい経済状況の下にも関わらず、種牡馬183頭、繁殖牝馬903頭が、そして27年から3年間では、競走用としても262頭が輸入されました。ここまでで繁殖牝馬数は8,000頭台まで回復していきました。

このあとご承知のように、昭和46年に、活馬の輸入が自由化されます。自由化から5年の間はものすごい輸入ラッシュです。5年間で種牡馬164頭、繁殖牝馬1,179頭、競走馬66頭です。このおかげで繁殖牝馬数は14,000頭に達しました。ところが、ここにきて生産過剰対策がいわれ、昭和53年に生産調整がはじまり、繁殖牝馬の数を12,500頭規模にしようとの方針が出され、おのずと輸入は低減しました。この状態は昭和60年まで続きます。

一方、この間の昭和56年に「馬事振興研究会」答申が出され、ジャパンカップが創設されると、世界に通用する強い馬づくりに向けての競馬サークルの胎動が始まっていったものと考えます。

それから現在に至るまでの競馬の趨勢、生産界・育成界の流れ、日本産馬の資質の向上は、すでに多くの方がご存じの所と思います。しかし、改めてこの間の輸入馬数を検証するのが本稿の目的であります。数字を説明するのには、やはり表が必要ですので別掲しております（**表1**）。

昭和61年以降の5年毎集計の輸入馬数を見てみますと。まず競走用馬数は、JRA の外国産馬の出走制限緩和計画が平成4年から8ヵ年・5ヵ年・平成17年以降と3次に亘って示されたことから、平成6年から18年までの13年間に年200頭以上最大470頭入ってきています。平成19年以降はやや沈静し

表1　サラブレット輸入頭数の推移

年　次	繁殖用			競走用馬			総頭数
	総　数	種牡馬	繁殖牝馬（受胎）内数	総　数	牡	牝	
			233	M28　豪州から初めて14頭			565
M40～44	341	22	S16刊 血統書I	（それ以前は支那馬と日本馬）			
T元～15		22	36	M32　豪州から再び30頭			
S元～12		28	S25刊 血統書Ⅲ	M33～ M41　豪州から各年20頭ずつ			
S13～26	－	－	－	－	－	－	－
S27～35	154	32	122　－	262	67	195	416
S36～40	407	49	358　－	2	0	2	409
S41～45	525	102	423　－	0	0	0	525
S46～50	1343	164	1179 (130)	66	25	41	1409
S51～55	219	108	111 (22)	105	80	25	324
S56～60	155	78	77 (29)	28	18	10	183
S61～H2	903	137	766 (415)	203	117	86	1106
H3～7	829	77	752 (527)	1073	675	398	1902
H8～12	858	45	813 (504)	1764	1206	558	2622
H13～17	728	35	693 (428)	1423	1007	416	2151
H18～22	622	29	583 (413)	879	578	301	1501
合計	7084	928	6146 (2468)	6029	3773	2556	13113

ています。この計画に対する生産界の緊張は非常に厳しいものであり、まさに強い馬づくりの3つの提言の実現に向けて、生産界変革の大きな原動力になったものと考えています。

繁殖牝馬の資質改良の命題、そしてノーザンテースト・サンデーサイレンスという2頭の種牡馬の存在が、繁殖用馬の輸入を大きく動かしたと考えられます。種牡馬の導入は少なくなっていますが、繁殖牝馬の頭数は年間150頭を超えています。輸入競走馬の三分の一は牝馬であり、これも繁殖用として捉える事が出来ますので、これら輸入された牝馬は、当然繁殖牝馬の更新に充てられていきます。

その更新のペースを乱暴な方法ではありますが試算してみました。

昭和46年から50年は、種付牝馬数が9,000頭から14,000頭へ増加し、輸入した牝馬により純増したものでしょう。昭和51年からは種付牝馬数は減・増・減の波を示しています。この昭和46年から5年毎の種付牝馬数の1年平均数を分母にして、当該5年間の輸入牝馬総数の占める割合を計算しました。**表2**の数字となり、この総合計は56.9%になります。現在の日本の繁殖牝馬の6割近くは、自由化以降の海外からの輸入馬の系統になっているものと、独自の論法と計算からですが想像しているところです。

平成25年は9,301頭が種付けされました。輸入牝馬の直仔がセリで注目され、クラッシックレースで活躍するトレンドは、まだまだ続くでしょう。世界に伍す血統の背景を得たとしても、加えて、生産技術・育成技術をゆるぎないものにするための関係者の努力は、国内生産、調教馬が世界で活躍するための必須要件と考えます。

サラブレッド生産と競馬は、全世界を舞台に繰り広げられてきたエンターテイメントです。日本の生産・競馬に関しても、常にグローバルな視点が不可欠なものと考えます。これからも日本の競馬が益々発展することを祈念しております。

表2　繁殖牝馬更新の目安

年　次	輸入牝馬数※	種付牝馬数※※	率（%）
S46～S50	1,220	11,376	10.72
S51～S55	136	13,087	1.04
S56～S60	87	12,462	0.70
S61～H2	852	13,017	6.55
H3～H7	1,150	14,074	8.17
H8～H12	1,371	12,242	11.20
H13～H17	1,109	11,368	9.76
H18～H22	884	10,075	8.77
合計			56.90

率：各年次５年間の（輸入繁殖牝馬 ＋ 輸入競走馬・牝馬）※
÷各年次５年間の種付牝馬頭数の年平均数※※